

官僚の責任



タイトル	官僚の責任
著者	古賀茂明
出版社	PHP 新書
発売日	2011年7月29日
ページ数	p222

最近テレビでもおなじみになった経産省から退職を迫られている改革派官僚、古賀茂明氏の本です。まず、官僚は自分達の利権を守ることしか考えていない。著者が身をもって体験した具体例を示してくれます。

はじめに、で東日本大震災の話が出てきます。この震災で、自助と助け合いの精神にあふれた日本国民の素晴らしさを示すと同時に、この国の政府のだらしなさ、無策ぶりを世界中に知らしめることになりました。この時官僚は「これは、大チャンスだ……」と少なくない数の幹部官僚がそう考えたはずだと著者はいいます。すなわち、震災という国民にとっての大参事も、彼ら官僚にかかると、利権拡大の絶好のチャンスとなってしまふのです。

震災後の復興も、原発事故の対応も、このままいけば従来通り、縦割りの各省庁から自らの利権を護る為に、無駄な税金が投入されるというわけです。

さて、本文を覗いてみましょう。まず、目次はどうでしょうか。・印は節を表します。

第1章 「政治主導」が招いた未曾有の危機

・早まった日本崩壊のカウントダウン、・テレビドラマ程度の対応すら実行できなかった政府、・震災に対する危機感を上回った政権延命の思い、・東電に逆らえない経産省、・被災地より大臣の想定問答集が大事、・仇になった「総理主導」、・責任逃れに終始した官僚たち、・増税の果てにあるものは、・餓死者や凍死者が続出してもおかしくない。

第2章 官僚たちよ、いいかげんにしろ

・発送電の分離は15年前からの課題だった、・原発事故の一因は経産省の不作為

にあり、・なぜ「5.7メートルで大丈夫」と決めたのか、・「官僚＝優秀」はとんでもない迷信、・天下りはなぜ悪なのか、・国民に気づかれないよう、こっそりやればいい、・「等」に隠された目論見、・民間に「押し付け」を強要できる仕組み、・権限争議という無益な争い、・通産省と郵政省がドブに棄てた2700億円、・塩漬けにされた国の資産、・海外インフラビジネスの危うさ、・利益は出なくても利権は生まれる、・発覚した裏金づくり、・国家公務員法改正への挑戦、・「これは革命だよ」、・葬られた改革案、・「天下り禁止」は夢のまた夢、・財務省に妥協せざるを得なかった理由、・民主党は官僚を使いこなせなかった、・能力がないからやる気だけが空回り、・民主党はウソつきではなく、たんなる勉強不足、・長妻厚労大臣の不運、・事業仕分けのまやかし。

第3章 官僚はなぜ墮落するのか

・改革派から守旧派へ転じた経産省、・規則を守ることが使命という「気分」、・自分たちで自分を査定するシステム、・霞が関は人材の墓場、・官僚になりたい人の動機、・必ずしも高い志は抱いていなくても……、・問題は入口よりその後、「国のため」でなく「省のため」、・利権拡大が「目に見える成果」、・ほめられるのがお好き、「不夜城」と呼ばれるほんとうの理由、・坪単価5000万円、・充実しすぎの身分保障。

第4章 待ったなしの公務員制度改革

・増税しなければ国は破綻するという脅し、・官僚一人のリストラで失業者5人が救われる、・国民のために働かざるをえない構造をつくれ、・年功序列による身分保障の廃止、・できなかつたら降格やクビ、・上さえ空いたら働く若手は必ずいる、・若いうちから仕事の醍醐味を味わわせれば……、・外部からの人材採用が不可欠な理由、・官民の移動を自由にする回転ドア方式、・Jリーグ方式を導入して天下りをトライアルの場に、・事務次官を廃止せよ、・縦割りから横割りへの意識改革。

第5章 バラマキはやめ、増税ではなく成長に命を賭けよ

・ちょっとかわいそうな人は救わない、・年金支給は80歳から、・ほんとうに守られるべき人のために、・国境を高くすることが農業保護ではない、・無駄な支援が企業の自助努力を阻んでいる、・中小企業支援は官僚のアリバイづくり、・某大手自動車メーカーが国を滅ぼす、・世界一の製品は世界一高くても売れる、「汗水＝美德」は世界の非常識、・生き残るのは「国籍」を棄てた企業、・官僚は外国企業の前で土下座せよ、・日本人が英語をしゃべれないのは官僚のせい、・国家の意思があればエネルギー政策は変えられる、・国民投票で脱原発を。

さて、本書は、節(せつ)ごとにまとめられており、それもテーマごとに2～5ページ程度とお手ごろなので非常に読みやすいのが特徴です。

まず、第1章は無能な民主党政権の批判で埋め尽くされています。鳩山氏、菅氏と続いた「無能政権に腹の虫が収まらない」と考えている人向きの章です。もっとも、鳩山氏や菅氏にとっては「何をするか」ではなくて、「何をしないか」だったように思います。民主党は、「人のやることにケチをつけるのは得意だけれど、いざ自分が当事者となったら、知識も判断力も全く足りない人達の集まりであったことが分かります。

以下、官僚批判の章へと続きます。現役官僚の古賀氏が体験した、我々が覗き見ることのできない具体例を読むことができなかなか面白かったのですが、利権が官僚にとっての売り上げであり、利権を拡大した人間が霞が関では評価が高く、また1、2年で移動があるので、責任の所在をうやむやにするという彼らにとっては都合の良いシステムが出来上がっているなど、官僚の利権拡大体質と無責任さは今に始まったことではないなどは思いながらも、読み進めるにつれて、だんだん何ともいえない暗い気持ちになってきます。

高校生が大学の医学部を目指すのは、それが「最も困難だから」という理由が第一です。それと同じように、東大生が官僚を目指すのも、とくにまじめな受験生として東大に入った人ほど、官僚を目指す傾向が根強いそうです。彼らの考えは、「合格するのが一番困難な就職先は何処だろう？ どうやら官僚らしい！、それも財務省らしい！ よし、そこを目指そう」だそうです。医学部然り、官僚然り、自分の本当の適性も考えないで行動するのが現代の若者のようです。

鳴り物入りでスタートした「事業仕訳」でしたが、民主党が官僚に敗北する結果になりました。というのも、いったん廃止という結論が出て、予算の項目だけを変えたりして復活するだけでなく、むしろ焼け太りになった事業さえ続出したといえます。ところが、「事業仕分け」でいくつもの事業が廃止の烙印を押されたにも関わらず、霞が関にそれほど慌てた感じがなかったのは、いろいろな骨抜きが可能であることを官僚は先刻承知していたからだというのです。つまり、「この事業が廃止になっても、こういう理由でこっちの事業にすぐ替えるから、心配ない」と官僚は、はなからそう考えていたというわけです。要するに、この「事業仕分け」は、脚本・演出は財務省で、「民主党は仕事をしていますよ」と国民にアピールする茶番劇だったというわけです。初日の作業では約500億円を削減できたそうですが、こんな調子で何日間やっても、たかだか数千億円浮くだけです。95兆円以上の概算要求を92兆円に削減するという目標には遠く及ばないのは始めからはっきりしています。こんなことより、子ども手当2兆3000億円や農業所得補償6000億円などの約3億円の「幹」を落とせば済むことなのにあきれたものです。

「ちょっとかわいそうな人は救わない」とか、「年金支給は80歳から？」などの著者

の主張はどうでしょう。「働ける人が生活保護や年金で遊んでいるのは守られ過ぎだ」というのです。その通りなのですが、そういう社会を目指すには、遊んでいる人達が働ける場所が必要なのです。言うのは簡単ですが、これなどは、一言でいうと「現場を知らない官僚の観念論」としか思われません。日本には年をとっても働きたい人は多く、60代前半の男性の75%以上が働く意思を持っているのです。中長期的に見ても高年齢者が増え、若者が減っていくのは明らかです。労働力確保という意味でも、高齢者雇用の合理性は十分あるし、経済や社会の活力を維持していくためにも高齢者が活躍できる環境の拡大が求められているのです。この受け皿を創ることこそ官僚の仕事ではありませんか。「高齢者も一種の身分である」などというような言い方は言掛かり(いいがかり)というものです。天下りで仕事もないのに1000万円もの年収をもらっている官僚と仕事がなく年金生活を余儀なくされている庶民とを同一視しないで欲しいものです。高齢化は世界的な現象です。年齢に関りなく働き続けられる社会を構築できれば、世界に日本発の国際的な基準を示すことになりませんか？そういうことを考えるのが官僚ではありませんか？

また、官僚たちは、共済年金支給年齢が65歳に引き上げられるのに伴い、無年金期間が発生しないように、公務員の定年を65歳まで延長しようと働きかけており、現に人事院が「定年を延長すべし」との見解を示し、具体的なスケジュールにまで言及している有様です。これだけ身分が守られていれば、国民のためになる政策を立案するわけがありません。

どんな時でも、どんな事柄にたいしても、常に「それが国民のためになるか」を第一の判断基準にしなければならないのが国家公務員である。省利省益と縄張り確保を第一義に考え、国民の利益をないがしろにすることがあってはならない。ましてや国民のために尽くしたら報われず、省益のために貢献した者が評価され、退職後も優遇されるなど言語道断であると著者は言います。

自身の組織に楯突いて、自身の職をかけて「公務員制度改革」に情熱を傾けている著者は、上司や部下あるいは政治家の一部にも助け船をだす人達もいたようですが、なにしろ、元外相の田中真紀子氏も「伏魔殿」と形容したように、とても並みの力では歯が立たない組織のようです。

どんな組織であっても、いくら優秀な人材が集まっても、全員が単一の価値観を共有すれば、新しい発想は生まれにくく、次第に淀み、活力を失っていき、最後には腐敗するというのには目に見えています。大胆な発想とは、多様な人間が集まり、意見をぶつけあいながら議論を進めることから始まります。それには、若手の登用と共に、外部からの優秀な人材の受け入れも積極的に進め、この「公務員制度改革」を是非実現にこぎつけて欲しいものです。

日本社会から、利己的な官僚を排除しない限り、モラルは荒廃し、経済も発展しないのは明らかです。国家公務員は常に批判を受けていないと墮落します。国民は常にクレームを出し、監視の目を緩めてはなりません。彼らは、営業努力もしないで、税法で強制的な力で収入を得ているだけなのです。

ただ、マスコミも含めて、何かへマがあるとすぐ政治家をたたいて溜飲を下げているような国民である限り、懸案の「公務員制度改革」などは夢のまた夢ですね。

理解し易く、読みやすい書です。本書をただ読むだけではなく、古賀氏への反論も含めて理論武装をしましょう。お薦めの一冊です。

2011. 10. 1
